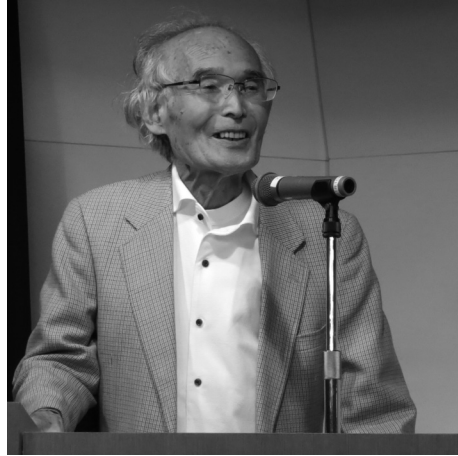


イスラーム研究の意義 ——戦後わが国のイスラーム研究の発展と私の研究——

加賀谷 寛

最近までわが国では、イスラーム(イスラーム)は、世界宗教ではあまりよく知られてきませんでした。近年イスラーム過激派の勢力の抬頭により注目されています。しかし一般のイスラーム教徒(ムスリム)はいたって平和的です。

私は戦後の日本でイスラームの研究に従事してきましたが、今回、その論文集が「京都大学イスラーム地域研究センター」から主に院生の参考用として編集されましたが、それは、selectiveであるよりcollectiveに近いので、著者には、未熟さもあり、恥づかしいものも含まれていると思われま



私は東京外国語大学のヒンドスタニー語学科に入學して、イスラーム研究との縁はそこから始まりました。そこで、ヒンドスタニー語に始まり、ウルドゥー語(Urdū)に初めて接したのです。ウルドゥー語はペルシア、アラビア語の影響が強く、これが私をイスラーム研究へ導いた始まりです。文字もアラビア文字に基本的に基づいているのです。言語だけでなく、人文科学、社会科学を修めなければ、イスラーム研究にならないということを身に沁みて感じました。

さて戦後のイスラーム研究に先行して、大久保幸次所長の回教圏研究所があり、ここに集まった研究者の戦後の研究に大きな役割りを果たしたことは、見逃すことはできません。私の恩師、蒲生礼一先生もその御一人でした。回教圏研究所から出版された雑誌『回教圏』は最近復刻されました。

さて当時、私に影響を与えてくれたのは、H. A. R. GibbとW. C. Smithであります。

前者は従来のヨーロッパ偏向のイスラームを批判し、イスラーム世界の近代までの幅を広げようことを提唱したのです。またその新しい概説書 *Mohammedanism* を訳出したのは私で、当時の歴史学者、人文科学者から御好評いただきました。一方、W. C. スミスは同時代の「パキスタン運動」を取挙げました。南アジアに関心を持っていた私は、著者の社会的、政治的な現代イスラームの分析に、大きなインパクトを受けたのです。なお彼は共産主義とマルクス主義を区別し、自分を自由なマルクス主義者すなわち自由主義者と自己規定しました。これに当時の若い私は共鳴したのです。

また私の学生時代に大きな世界史的な事件として、アジアの反植民地運動の高揚があり我々に大きな影響を与えていました。私もこのアジアの民族運動を支持していました。

学生時代、このような状況の下で同人雑誌『インド、イラン評論』を発行いたしました。

私はこうして東京大学大学院修士課程で、宗教学宗教史学を学びました。当時、イスラーム研究専門の師はおられませんでした。ここでは、それまでのような言語だけでなく広い視野でイスラームを学ぶことができました。

その後、大学院修士修了とともに東大の東洋文化研究所の助手に採用されたのは、大変幸運なこ

とでした。この時代には、イスラム研究の欠如が、日本の学界で強く感じられていたからだと思います。助手採用の同年、イラン政府からテヘラン大学留学の募集があり、これに応募し早速、イランへ向かいました。私はこの機会に、現代のペルシア語 (Fārsī) とともに、シーア派 (12 イマーム派) に関心をもちました。また、この留学中にイランの地方を旅行し、帰国までには、トルコ、アラブ諸国等を旅して、イラン周辺の国々を見ることができました。

私のイラン旅行の成果の一部は、a) 19 世紀末の「タバコボイコット」(Tahrīm-e Tanbākū)、b) 20 世紀初頭の「イラン立憲革命」(Inqilāb-e Mashrūteh)、c) レザー・シャー時代の A. カスラヴィーのイスラム批判思想の三点でありました。

これらは、日本では初めて学界で紹介されたのです。その後大阪外国語大学より、ウルドゥー語学科へのお誘いがあり停年までウルドゥー語を教えることになりましたが、語学とともに、イスラム研究を続けてまいりました。

既述のギブが提唱したように、一方でイスラム世界の言語を、他方で人文科学、社会科学の方法論を、研究してまいりました。

この間、東京大学に「イスラム学専修課程」が生まれました。東京外国語大学に「アジア・アフリカ言語文化研究所」が、また京都大学大学院に「イスラーム地域研究センター」が附置され、各大学もイスラム研究を進めております。これらは、日本のイスラム研究の未来が大きな可能性をもっていることを示しております。